



錦古里 小夜子さん

きくろ 錦古里商店（北24西3。現在はコンビニエンスストア）の二代目。現在は小夜子さんの長男が三代目として経営。昭和30年代から、北24条周辺の街並みや人の流れを見つめてきた一人。北24条商店街の振興に力を注いでいる。

TOPIC トピックス・極 TOPIC TOPIC

vol.4

老舗から見た街の移り変わり

昭和二十三年創業の酒屋「長久屋・錦古里商店」。北二四条かいわいで最初の商店として親しまれ、「コップに盛り切りを一杯すつ売る」もっさり酒」を楽しみにする人々が集まる交流の場でした。

私が店を手伝い始めた昭和二十七年当時は、新琴似方面の農家の人たちが馬車に大根を載せて札幌駅方面に売りに行く「大根馬車」が、まだ行き交っていました。夕方になると、そうした農家の人たちが店に立ち寄ってくれるのですが、馬がすっかりその習慣を覚えて、店の

条まで延長。人々の足として親しまれました。その後、交通手段の主役は昭和四十六年に整備された地下鉄へと移り変わります。

北二四条かいわいの街並みが大きく様変わりしたのは、やはり地下鉄の開通でしょうか。それまでも市電が走っていたことで、人々の行き交いは多かったのですが、開通後は、まさに人の波が押し寄せてくるような感じで、新しい建物が立ち並ぶな

前に来るとびったり止まるんですよ。パカッパカッ：馬のひびめの音が近づくとうれしくてねえ。お客さんと一緒に、その日の出来事や将来のことなどを話し合っていましたね。お酒をたたくことよりも、お互いに会話を楽しみ交流する、そんな面白いをしていましたよ。

昭和二十七年、市電鉄北線の北一八条―北二四条間が開通し、昭和三十四年には北一七

ど風景が見る見るうちに一変しましたね。その一方で、人と人との交流が薄れ、心通わせる場面が徐々に少なくなりました。例えば、店の前で、通り過ぎる人たちにあいさつをしても返事が返ってこないことがあります。対面販売をして人と会話をすることが当たり前だという感覚が身に付いているだけに、ふと寂しく、



昭和47、8年ごろの北24条西4丁目付近。麻生方面に伸びる市電の姿が見られる。地下鉄が開通したこのころから、街並みは様変わりしていく。

何か失われたものを感じますね。そんな中、七、八年前くらいから、店に年配の方が訪れ、新聞紙に包んだ花束をくれたことがありました。まだ店が「もっさり酒」を売っていたころ、お酒を飲んでいたその方の服が破

うと、うれしくて涙が出ました。人とのふれあい、対面販売をしていたからこそ生まれた思い出の一つです。

現在、北二四条付近では、商店街が中心となり、自分たちで育てた野菜を食ったり販売したりする地産地消の活動や、花で街を美しく飾ることなど「食と花」をテーマにした「スローライフ・イン・にーよん」と呼ばれるまちづくり活動が行われています。

街に少しずつ元気が戻ってきた気がしますね。プランターに花を植えたり、収穫祭を行ったりすることで、住民同士が交流し、心を通わせることのできる場が増えました。この取り組みがきっかけとなり、自分たちの街を良くしていこうとする人間関係の輪が確実に広がっていることを実感しています。物がなく貧しくとも、お互いに助け合い心豊かだったころ。そんな良き時代を思い出しながら、これからもこの街を見つめ続け、暮らしていきたいと思えます。